新しい居場所による登校支援

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校へ入学直後から欠席や遅刻、早退が続いた。小学校から不登校傾向が続いており、進学に当たって毎日登校できるよう意識を切り替えようとしていたものの、登校が難しくなっていた。学校へ気持ちが向かない日は欠席となっていたため、欠席日数が増え、不登校になりそうな懸念があった。

具体的な取組

○校内体制の強化

不登校対応巡回教員が毎週の校内委員会に出席し、当該生徒の情報を共有し、具体的な支援策の検討に関わった。ＳＣやＳＳＷと連携し、当該生徒や保護者と関わりながら対応を行った。

○新たな居場所づくり

当該生徒へ新たな居場所として設置した別室を提案した。授業の前後に訪れて気持ちを整えたり、給食時のみ訪れたりするといった、様々な対応を可能にし、登校しやすくした。

○保護者への対応の強化

当該生徒の様子について、ＳＣやＳＳＷと連携し、家庭との連携を強化した。別室で過ごす様子や、学校で話したことについて保護者に共有し、家庭での当該生徒の様子や、登校した日の振り返りについて聞き取った。登校の安定へ向けた方向性について保護者と共有した。

○段階的な授業参加の促し

別室での指導内容を、会話から学習指導まで幅広く設定し、当該生徒の登校への心理的ハードルが高くならないようにした。別室へ来ることが安定してきてから、徐々に授業への参加を増やし、登校を安定させた。

成果

４・５月に合計６日あった早退が、その後０日に減り、自分で決めた曜日には安定して登校できるようになった。気持ちが安定しない時に、生徒が自分から担当の教員や担任に話せるようになった。

課題

不登校対応巡回教員が不在時の別室の体制を構築する必要がある。

校内別室利用を中心とした組織的な支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、入学前から同年代の他者とコミュニケーションを取ることに苦手意識を抱えていた。教室の集団の中で過ごすことに不安や緊張が強くあり、2 学期から登校を渋ることが多くなったが、別室登校を始めてからは毎日登校できている。

具体的な取組

○校内別室の活用

他生徒とのコミュニケーションに苦手意識があり、教室に入ることが困難な生徒に対して、会議室の個別スペースを使用して別室対応をしている。

基本的には、授業プリントや学習者用端末を活用して自習をしているが、週に何時間か学習支援員が個別対応を行っている。

個別スペースにすることで、周りの目を気にせず、安心して学習に取り組めている。

○教育支援センターと併用した登校

別室と併用して通っている生徒が多い。小集団で他者と関わる活動があるため、集団活動参加へのスモールステップとして活用できている。

○学級・学年教員との継続的なつながり

毎日、学習内容を記録するファイルを学年教員から受け取る際、挨拶や課題のやり取りを通して、コミュニケーションを取っている。

また、学級の生徒に給食を運んでもらったり、学級の様子を教えてもらったりする中で、学級への帰属意識を高めている。

○不登校対応巡回教員等との関わり・校内委員会で情報共有と支援検討

当該生徒は、毎週水曜日に不登校対応巡回教員に近況を話すことで、相談しやすい関係になっている。同日開催している校内委員会では、別室対応生徒の様子を共有し、今後の支援方針を、特別支援面を含めて検討している。また、ＳＣ、ＳＳＷ、支援員、養護教諭、他学年の教員等が日々組織的に声をかけていく中で、コミュニケーションに自信をもち、少しずつ同年代とも話すことができるようになっている。

成果

学校全体で組織的に見守り、声をかけていることで、孤立感なく校内別室が安心できる居場所となっている。教育支援センターとの併用や学級への参加方法等、適宜タイミングを見極めている。

課題

別室対応の人員を確保する必要がある。また、学級数が増加した場合の場所の確保が必要である。

「居場所づくり」と「多様な学びの場」をコーディネート

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校２年生であり、特別支援教室を利用している。１年生の３学期から校内別室の利用を始め、２年生で多様なプログラムに参加し、精神的にも安定した。その後、学習に対する意欲が芽生え、在籍学級で授業に参加することが増えた。

具体的な取組

○校内別室の設置

不登校対応巡回教員が支援委員会に参加し、他校の校内別室の取組を紹介するとともに、本校の校内別室の設置に向けた調整を行った。不登校生徒の在籍学級への復帰に向けた段階的な登校手段とするとともに、居場所をつくるために、設置している。

○アンケート・三者面談

校内別室を利用している生徒に対して、自分の心と体の状況を知り、生活を振り返るためのアンケートを実施した。そのアンケートを基に、不登校対応巡回教員、校内別室指導支援員、生徒で三者面談を実施した。生徒の状況を把握し、困りごとの相談を行うとともに、学校生活の目標を設定することができた。

○ICT の活用

校内別室において、毎朝 11 時にオンライン学活を行った。別室に登校している生徒とともに、自宅にいる生徒が参加することもできた。不登校生徒の別室及び自宅での学習には、オンライン学習教材を利用している。

○校内研修の活用

学校満足度調査を年間２回実施し、結果の分析及び活用方法について、外部講師による校内研修を実施した。不登校リスクの高い生徒を把握し面談を実施するとともに、学級の課題を解決し、不登校の未然防止を図ることができた。

成果

巡回教員が支援委員会に参加し、都の連絡会で得た情報や他校の取組について、管理職や教員と共有することができた。また、校内別室の設置を進めた。

不登校リスクの高い生徒に早期に対応できた。

課題

校内別室設置についての環境整備が必要である。

巡回教員の週１日の勤務は、巡回校の不登校生徒の状況を把握する工夫が必要である。

学力を身に付けるための支援等について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校２年生から不登校になり、学習を積み重ねていないため、学習不振に陥り、授業に参加することができない。

具体的な取組

○近隣の民間施設の活用

学校への登校が困難であることを受け、近隣の民間施設と連携し、施設への登校を促し、居場所をつくっている。また、近隣の民間施設に通う他の生徒とカードゲームに取り組んだり、共同作業をしたりすることで、コミュニケーションを図り、仲間との関係づくりを行う。

○校内別室での給食喫食指導

学校給食におけるバランスの良い食事で栄養を補う。

友達と一緒に食事をすることで、仲間との関係がより強まり、様々な活動への活力へとつなげている。

○校内別室での学習指導

校内別室で支援することで、生徒が安心して登校できる環境を用意する。別室において、様々な学年を対象とした漢字プリントを用意し、取り組めるようにする。タブレット端末を利用し、教育支援ツールによって個人の学習レベルに応じた教材を提供する。

○畑で作物づくり

校外の畑で協力して作業を行った。私服登校可とし、参加へのハードルを下げて、共同で作業することでコミュニケーションを図り、所属感を感じられるようにし、作業した作物が育つことで自己有用感を高めるようにする。

成果

近隣の民間施設と校内別室へ定期的に通えるようになった。給食を食べられるようになった。校内別室で２時間程度学習に取り組めるようになった。

課題

近隣の民間施設、校内別室に通える日を増やし、学力不振の解消、コミュニケーション能力の向上を図る。

教室復帰への第一歩としての多様な取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校２年生であり、小学校５年生の頃から不登校傾向であったが、中学校入学後１週間程度は登校した。しかし、各教科の授業が進むにつれ不登校傾向が顕著となり、その後は欠席が続いた。

具体的な取組

○校内体制の強化

校長、副校長、生活指導主任、特別支援教育コーディネーター、不登校担当教員、養護教諭、各学年担当、不登校対応巡回教員、ＳＣ、ＳＳＷからなる支援会議を週１回時間割に組み込み、不登校生徒の最新状況の共有、支援方法の確認を確実に行っている。

この支援会議での話合いに基づいて、生徒対応や保護者連絡などを担任が行い、家庭との共通理解を図り、個別対応を実施している。

○別室給食の実施

教室に入ることはできないが、別室であれば登校可能な仲間と共に少人数での給食指導を行うこととした。

ここでは仲間と会話をしながら楽しく会食できるよう配慮している。

○行事への参加

別室での指導や給食の機会を生かし、校外学習や体育大会、合唱コンクールなどの行事を話題にすることにより、本人の意思を尊重しながら様々な形で行事への参加を図っている。

○校内別室の活用

不登校対応巡回教員の配置により、週１日の別室指導が可能となった。時間帯によっては、校舎から離れた別棟にある会議室も活用している。

成果

不登校になってからは全く学校に足を踏み入れることができなかったが、別室給食を開始して以来、給食時にはほとんど休むことなく参加している。また、これをきっかけに仲間との会話も増え、体育大会の学年種目に参加することができた。

課題

別室指導専用の部屋を確保することができず複数の部屋を都度利用している。